第二百九十回　青葉会

平成二十二年五月二十七日（木）午后六時～九時
丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉☆川合万里子　先生

〈出席者〉今井紀久男　大林猛　小川恭延　柿崎忠彦　小西弘子　豊田ゆたか　橋口隆　山崎亜也
山内天牛
〈投句〉伊賀山そらお　石川清　朱牟田恵洲　土谷堂哉　中山芳博　福島正明　南平和夫
宮内規雄　渡邊盛雄
〈紙上選句〉赤田堅　庄司龍平　高橋敏郎　早川允章　福島正明　星田啓子　村田くに子
山崎青史（陽亮改め）山本三恵

《選者吟》

鍬先の墓（ひき）の無傷を確かめる　万里子（ゆ・啓・青・天・三）
夜泣き子へ宥め鳴きする青葉木菟（なだ）（あおばづく）　仝（弘・敏・ゆ・青）
食べられる花々を植ゑ五月晴　仝（龍・青）
明け方の釣果を鮓に誕生日　仝（隆）
九十九折（つづらを）り新緑常緑映え合ひて　仝（猛）

ゴシックは選者の天

《互選句》

七点　風薫る先陣は孫土手滑る　堂哉（恭・忠・弘・敏・允・く・青）
（上五↔下五）（青…動詞二つあるのが気になる。中七下五→孫先陣の土手滑り）

六点　薫風や飛鳥路渡る鐘の音　そらお（堅・猛・忠・敏・ゆ・允）
☆山寺や崖に余花あり仏あり　忠彦（万・堅・弘・龍・敏・天）
多摩川を渡る電車に夏来たる　恭延（敏・允・亜・天・三）

五点　追憶は友の慈顔や五月雨　仝（堅・弘・龍・ゆ）
遣り場なき怒りは雨に牛洗ふ　弘子（紀・忠・く・亜）

四点　大仏に小さく供へし夏蜜柑　仝（恭・忠・天・三）
白てつせん活けて裏店薬味商　ゆたか（紀・允・く・青）
（青…裏店が薬味商とダブル感じなので裏路地では？）

三点　☆松落葉きのふ会ひたる人の通夜　隆（万・恭・敬・三）
☆揚巻から紫蘭の届く楽屋かな　紀久男（万・亜・三）
☆青葉風楽屋に点前（てまえ）頂けり　仝（万・ゆ・隆）
（☆→お点前をいただく楽屋青葉風）

二点　逢ひたくも友偲ぶのみ夏嵐　恭延（堅・紀・啓）
（青…楽屋に　は　楽屋で　がいい。に、で　は説明になると言われて嫌われるが、必ずしも然に非ずです）
葉の一本きりり鉢巻菖蒲風呂　堂哉（猛・啓・く）
（青…葉の　は余計。鉢巻きにきりりは付き物で古い）
黒南風や荷風の歩きし放水路　亜也（ゆ・正・く）
（正…歩みし？では）
卯の花や畏友明彦先に逝く　天牛（堅・紀・忠）
☆五月来て揚巻助六若返る　仝（万・紀・正）
（正→次世代の揚巻助六風薫る…では？）
遺伝子を動かす人の青き薔薇　盛雄（龍・青・天）
（青…面白い句。動かす人の　が分かりにくいので、操作する人としてはどうか）
☆ゆったりと鮓桶囲む出番前　紀久男（万・弘）
夏場所や千勝飾る古力士　恭延（堅・隆）

☆新緑の墓碑に絆の銘並び　忠彦（万・く）
月山やゆったり泳ぐ鯉幟　仝（恭・允）
網の戸を順に洗ひて風を変へ　仝（龍・正）
（青→網戸）（正→網戸洗ふ気になることの多々ありて…では？）
この次の江の電かしら青芒　弘子（正・亜）
☆祭稚児眠り呆ける父の肩　仝（万・忠）
（青→父の背（せな））
ぬけぬけと五月の風の色となり　芳博（亜・三）
母の日や母逝き故郷遠のきぬ　規雄（隆・允）
☆牡丹花を剪って實存實感す　亜也（万・正）
（正→そう決めて牡丹を剪れば手に重く…では？）
雑草に埋もる雛罌粟（ひなげし）の孤独かな　盛雄（紀・亜）
何時切らる熟れと匂ひに待つメロン　清（猛）
贈られし箱を開ければ七変化　仝（紀）
万緑や朱色眩しき比叡山　そらお（啓）
友偲ぶ冷酒（ひや）ほどほどに前向きに　紀久男（恭）
寒暖の起伏険しく春深む　猛（紀）
花が葉に人の風情もそれなりに　仝（龍）
神様と慕はれし友夏に逝く　恭延（天）
☆青時雨スカイツリーの頂隠す　仝（万）
☆昨日より重き子を抱き薔薇の風　弘子（万）
平成の武者人形は顔やさし　恵洲（紀）
よそ者も混じり居るらし荒神輿　仝（隆）
紙魚痕も歴史の遺物家伝の書　ゆたか（く）
大空を風がおとなふ五月かな　芳博（隆）
皇后の辞儀する車列子供の日　隆（正）
（正→深々と皇后の辞儀揺れる麦…では？）
不自由は旅の額縁（がくぶち）杜若（かきつばた）　正明（紀）
胡瓜揉み企業戦士の成れの果　仝（隆）
（青…成れの果ては少し可哀相。→故瓜揉むかっては企業戦士なり）
初鰹冷凍倉庫より一直線　和夫（猛）
父に並べ母埋葬す麦の秋　規雄（恭）
（☆上五中七→父の辺に母を葬る）
（青…埋葬は強く響き過ぎる。考と妣と言う言葉があること。ご参考まで）
水茄子やまろきを賞でつ頬ばりつ　亜也（天）
柏餅味噌餡うまき老舗あり　天牛（猛）

一点

●次回青葉会
六月二十四日（木）　午后六時～九時　（丸紅・談話室）
七月二十二日（木）　仝　（　仝　）
▲当季雑詠各自五句。投句は二句

以上文責　紀久男

第二百九十回青葉会後記（平成二十二年五月）

一、今回は万里子先生以下１０名出席。投句９名。５月１６日急逝された佐野明彦さんを偲び献杯して始まりました。３月亡くなられた村岡英樹さんに続いての訃報で、気勢の上がらぬ句会となりました。それでも先生お手製のおつまみ（蕗の豆板醤漬、サラダ菜・生ハムのチーズ巻、ルッコラと松の実）市原弘之さんからの「出羽桜」大吟醸（山形）亜也さんからの「太平山」大吟醸（秋田）、弘子さんからの芋焼酎「一壺春（いっこしゅん）」（宮崎）を呑み食いしますと、少しは元気が出てきたようです。

披講、合評の司会をゆたかさんが円滑にこなされ、御覧のように堂哉さん、そらおさん、忠彦さん、恭延さんが好成績でした。

二、今回はなくなられた明彦さんと同期の恭延さん、天牛さんの明彦さんを悼む作品が目立ちました。明彦さんは遺言で家族葬だけの予定でしたが、喪主の御長男の意向で、親しい人達とのお別れの場を設けることにされた由で、堅さんら謡曲部の人々が参列。「江口」を謡って御出棺を見送られたそうです。

「追悼句」は青葉会の内々の人達のみに依頼しました。「遺句」もここ数年の作品から小生が勝手に抄出したものです。ほかに好句が多々あることと思いますので、御存じの方はお教え下さい。

追悼句の中にも詠まれておりますが、人格者でした。商社マンであれだけ腰の低い謙虚の人、好学心旺んな真面目な人は珍しいと思います。あの世で川合絹瀬先生、村岡英樹さんらとグラスを傾け乍ら句会に興じておられるのでは、と想像しております。

三、当会の「助六句会」に役者の絵を加えたものを五月新橋演舞場の河東節（かとうぶし）十寸見会（ますみかい）の楽屋の壁に貼りました。四月歌舞伎座さよなら公演「助六」出演記念の『楽屋句会』の投句函に並べ、応募のＰＲにしたものです。『楽屋句会』に團十郎が真っ先に応募。続いて三津五郎も短冊を届けてくれました。肝心の会員からの投句がいまひとつ少なかったのですが、「助六句会」を貼り出してから応募が増えてきて、ほっとしている所です。

四、関係者近詠

永別やミモザの空の唯青し　万里子
風波を掠め次ぎつぎ鴨帰る　仝
若き歯の葉ごと噛み切る桜餅　眞希子
治ったらの指切りげんまん春の風邪　仝
制服の三年の着擦れ卒業す　仝
相模線電車水面に田植時　和夫
無人駅に臨時駅員桜咲く　仝
お土産の赤福で知る抜参り　忠彦
花見舟手を振りあひて橋を過ぎ　弘子

―『萬緑』６月号―

洋蘭に不純の匂ひ嗅ぐ不純　青史
誰某の底意地見たり更衣　仝
噴水の頂点極めどどどどど　仝

母の日や風樹の嘆と言ふことを　奥西邦夫

―「ＮＨＫ俳句」５月２日　西村和子特選一席（評もあり）

人も水も楓若葉に染まりけり　允章
桃色の霞に沈む甲斐の国　仝
しらじらと小暗きあたり著莪の花　仝
淡雪や舫いしままの屋形船　恵洲
春雨や購めし古書の持ち重り　仝
水彩に霞の色を出し兼ねて　仝

―『大鉄会』４月・小石川後楽園―

薫風や家族の数の括り猿　堂哉
冷し酒午後の予定はさりながら　仝
健診を終へて眩しき街薄暑　允章
潮騒にとべら花咲く魚見小屋　仝

○　○　○　○

何かみしりと二階で鳴った主の居ぬ夜の寝間の闇　恵洲

〔ＮＨＫラジオ折込都々逸「なにぬね」〕

平成二十二年六月十一日　紀久男記